

石川理紀之助翁の救荒植物記事から  
—もごらとキクイモ—

公益財団法人  
日本植物調節剤研究協会  
技術顧問  
森田 弘彦

江戸時代から明治時代に移って、新政府は農業技術についても欧米からの導入を図ったが、農科大学などで近代的な農業技術を学び農事試験場をはじめとした組織的な技術開発を担当する人材を育成するには時間や手間を要した。そこで新政府は、農業技術や農村生活の改善に豊富な経験・知識・展望を持ち、指導力のある「現場熟練且老実なる農学家」を「老農」と呼び、全国各地で活用した。「奈良稻」や「太一車」など作物の在来品種名や改良農具の名にこうした老農の活躍をしのぶことができる。「老」の文字は「高齢者」ではなく、徳川幕府の要職「老中」の「老」と同じ内容を意味するそうだ。

秋田県における老農の筆頭格で、技術と生活の両面から農民・農村改善に尽力し、今日でも「聖農」として敬愛されるのが石川理紀之助翁（1845～1915）である。石川翁の「老農」としての業績はここには書き尽くせないが、1878（明治11）年に始まり、2016年で139回を迎えた、農作物の優良品種・農業の新機械や新資材の紹介から収穫物の品評会までを扱う総合型農業フェスティバルである秋田県種苗交換会や数々の教訓に満ちた標語などの遺産が、現代に脈々と生きている。多くの遺訓のうち、「井戸を掘るなら水がわくまで掘れ」の語は、2008年1月の時の福田康夫内閣総理大臣の施政方針演説で引用され、「寝ていて人を起こすことなかれ」の語は2009年の秋に東京都神社庁のポスターに使われた（図-1）。

明治・大正年間の困窮した農村を救済するうえで、飢饉に備える救荒の知識は不可欠で、石川翁もこのことに力を注いだ。翁は非常に多くの著作を刊行したが、逝去直後の1917（大正6）年に老農の同志、森川源三郎氏の手で「老農全集」として編集・刊行された4冊のうちの「備穀救荒録」に、救荒に関わる事蹟が「備荒摘要：草木谷山居 庵の手鍋 正篇：同 続編：救荒策」として収められた。また、太平洋戦争末期の食糧難に活かす目的で、翁の薫陶を

受けた秋田の教育者兒玉庄太郎氏により「農聖の食糧対策 石川理紀之助翁の實踐 1943」としても出版された。石川翁の救荒知識の収集と実践への真摯な姿勢は次のように書き残された。

「・・最初は先づ翁は山田村改良の為に興された耕作會の會員を語らひて、糧（かて）の調理法を研究したが、往年の飢饉で死亡者の多かつた理由は、糧を慥へる方法を知らず、只漫然と穀物の缺乏につれて、草木の根や葉を食つた為にあるので、（中略）毎月會合の際には、晝食を整へて持ち運ぶ事としたが、その晝食は自分の心で調理した粮入りの御馳走で、會員一同それを試食し合つて、その優劣を判別した。その後、附近數十ヶ所の賛成があつて、明治十一二年頃には非常な盛會となつた。（石川老農事蹟調査會「天下之老農 石川理紀之助」1915）」

「・・明治二十二年四十五歳ノ時草木谷ト稱スル山谷ニ獨居シ同三十一年山居小屋焼失スルマデ十年間貧民生活ト體驗トヲナシ、殆ンド無一物ヨリ始メテ經濟的確立ヲ行ヒ農村經濟ノ立行カザルナキヲ立證セラレタルハ有名ナル事實ナリ、此ノ間常ニ山野天生ノ雜草ヲ利用シ自ラ食用ヲ試ミ又人ニ之ヲ傳ヘタリ、是レ秋田ハ古來キカツ（飢饉）多ク古ニ於テハ之レガタメ多數ノ死者ヲ出セル苦キ經驗ヨリ此ノ救荒の方面ニ大ニ考慮セラレタル所以ニシテ山居中の該實驗等ハ翁ノ著『庵の手鍋』ニ詳カデアル。・・（村松七

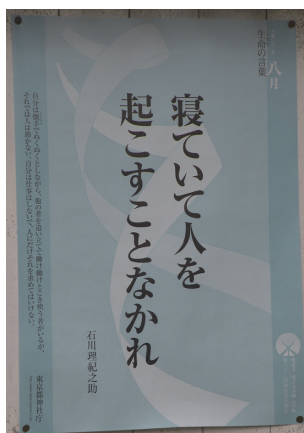


図-1 東京都の神社で使われた石川理紀之助翁の遺訓



図-2 自らの実践を基に執筆・刊行した「草木谷 庵の手なべ」



図-3 救荒植物「もごら」：「庵の手なべ 下巻」所収(左)、「救荒食物圖解」所収(右)：秋田県潟上市郷土文化保存伝習館所蔵、秋田県潟上市教育委員会提供



図-4 「庵の手なべ 下巻」の「もごら」に相当するキジカクシ科のヒメイズイ



図-5 明治年間に石川翁が秋田県への導入を試みたキクイモの花(上)と塊茎(下)

郎「石川理紀之助翁『救荒食圖解』ニ就テノ記」植物研究雑誌7 1931)」

さて、「草木谷 庵の手なべ 1898 (図-2)」の「下巻」には以下の解説で「もごら」の項がある。

「もごら 言方 (山本郡大口村金子兵左衛門氏 傳)

此草は濱邊の砂地等に多くあり 大饑の年には大にこれを以て人の助りたるよし 葎(もごら)といふ草もあれハもごらの圖を掲ぐるなり 又砂地の荒れ畑には澤山生するものにて莖薄赤く實丸く黒し其根を掘りて食ふ 其形回り四五分の物多く色白く毛あり 其毛を去り細に刻み一夜水に浸して飯に焚き込み又は根斗りを餅に搗きて食するなり」

筆者には、前記の「備穀救荒録」と「農聖の食糧対策」にそのまま転用された「もごらの図(図-3左)」は実在する植物とは思えなかったため、秋田県潟上市郷土文化保存伝習館(石川翁資料館)において、老農の同志である伊藤永助氏の描かれた「もごら」の彩色図を含む史料(石川・伊藤「救荒策 下巻 救荒食物圖解」1898(図-3右))を拝見してやっと、これがヒメイズイ(*Polygonatum humile* 図-4)であることを知った(秋田県立大学「ひとつくりとものづくり-秋田県立大学の挑戦」2013)。前掲の論文でこの「圖解」を解説した村松七郎氏は「もごら=ヒメイズイ」としたが、「備穀救荒録」などには彩色図に伴う印刷コストのためか「圖解」が掲載されずに埋もれてしまい、「もごらの図」の方が世に伝わったせいで、筆者が困惑することになったのであろう。

次に、「庵の手なべ」ではこの後の「いそろ(アオヤギソウまたはオオシュロソウ)」、「濱よもぎ」に続いて「菊芋」が紹介された。江戸末期から明治時代にかけての植物学者である伊藤圭介博士の「救荒植物集説 1884(?)」からキクイモの来歴と特徴を引用したのち、以下のように述べた。

「因云予此菊芋の一度植れば其根絶る事なく悪地にも能く繁茂するを以て 果して救荒の用に立へしと先年草木谷の畑添の山の斜地に植付たれば二三年にして満面繁茂せり如此にして後年飢饉の節にハ村民掘取て助とすへしと語り居りしか或時ふと思ひ付き 予死後には此山中に人住む事なかるへしされば必夏草に刈取るへし 試みに夏の繁茂最中に刈取て見んと一年刈取りしに豈圃ん翌年より次第に減して今は一茎の跡もなくなりぬ 参考に記し置く 但荒畑其他明地に植て秋熟の時掘取らば最も収穫多きものなり○此芋南秋田郡北磯村の豪農田沼慶吉氏は積年培養して種子を人にも施し増殖を奨励せり 随て栽培に實驗あり望みある者同氏に問ふへし」

北アメリカ原産で、路傍などに生育して時には飼料畑などで帰化雑草となり、現在では塊茎の利用の為に再び栽培されるようになったキクイモ(*Helianthus tuberosus* 図-5)\*は、イギリスの初代駐日総領事・公使の Sir Rutherford Alcock が文久年間(1861~1864)に伝えたとされる(久内清孝「帰化植物」1950)。大正年間には「今は北海道その他栽培地方には野生に化せる處少なからず(平山常太郎「日本に於ける帰化植物」1918)」であったが、秋田県での帰化植物キクイモの初記録は1937(昭和12)年(須藤孝久「秋田県の帰化植物概報」秋田自然史研究4 1975)なので、雑草化を防止したうえで導入を試みた石川翁の教えが、どこかで途切れたことになる。

もごらとキクイモを通して、旧来の知識も新しい素材も、有用と実感したことをすべて農業農村改善に注いだ石川理紀之助翁の一貫した姿勢が伝わり、本稿用に参照したどの史料を見ても、背筋が伸びるような緊張感に包まれた。

\*：本稿ではイヌキクイモ(*H. strumosus*)を含む。